

長生きしすぎたよ・・・
でも、いろいろありがとう。



今から8年程前のある日のことでした。在宅診療中に私の妻から電話がありました。「大変です。父が意識不明になりました」と。前日、義父は食欲不振だったので内科医のK先生に往診していただいていたのですが、治療のための点滴静注を拒否していたのでした。どうやら義父が自分で何かを注射したため病状が急変したようです。そばに使用後のアンプルが2本あったと言います。

私は急いで看護師・運転手ら数名の医療チームを連れ、義父の住む南予に向かったのです。松山を出るころには空がうす暗くなり始めていました。道すがら義父の経歴を思い浮かべると私は涙が溢れ出て止まりませんでした。

義父は、秋山兄弟の兄(秋山好古)が校長をしていた私立北予中学校(現:愛媛県立松山北高校)に入学。秋山好古氏は白馬に乗って現れたとか。その後、愛媛県第一中学校(現:愛媛県立松山東高校)に転校。九州帝国大学医学部から海軍兵学校で学び、戦時中にはフィリピンへ軍医として派遣されていました。敗戦後は一般人と一緒に帰る最後の船、つまりしんがりを努めて日本へ帰還したのです。先に飛行機で帰った義父の上官や同僚の医師は、残念な

がら米軍機の攻撃により戦死されたのだそうです。当時、軍医もいざという時のため自決用のアンプルを持っていたようで、義父は戦後も大切に残していたのではないかと思います。

そんな思いを巡らせているうちに無事到着。義父の意識はなんとか戻っていて、診察を始めました。私は「お義父さん、患者さんにしてきたことは自分も拒否などしないで入院し、1日1本の点滴治療を受けてください。それは医師としての義務でもありますよ」とお願いしました。後で義母から「お父さんは下行結腸がんで余命1ヵ月と自分で診断してるのよ」と教えられました。すみやかに地域の市立病院に入院してもらい、「一週間もすれば元気になるから松山に来てくださいね」と私が言うと、「いろいろありが

とう。しかし、長生きしすぎたかな・・・」と答えました。そしてそれが義父の最期となりました。

私は思うのです。もと軍医さんには誇り高い武士の魂が宿っているのではないかと。

最近、CTスキャン・PET検査など医療機器の進歩には目を見張るものがあります。

しかし、今の流れには反省も必要です。

医師が患者さんと向き合った時、東洋医学という四診(望・聞・問・切)で病気の気配をキャッチした上で、その後の医療機器での詳細な検査となります。

古典的な腹診と病状で診断できる名医がまた一人、この世を去ってしまいました。(義父の診断は正しかったのです。入院時、大腸ファイバー検査で確定診断をうけました。)

「お医者さんが来てくれる」
質の高い在宅医療・看護・介護
を『千舟町クリニック』は目指しています。



機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>